

中臣遺跡発掘調査概報

昭和57年度

京都市文化観光局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

京都市域には、平安京跡をはじめ、過去数千年に至る間の各時代の遺跡が各所に存在し、周知の埋蔵文化財包蔵地の総面積は、およそ5,000ヘクタールにも及んでいます。

古都といわれてきた京都も現代都市へと変容しつつあり、市内のいたるところで、かつての木造家屋群は、ビルへと変わり続けています。また、土木工事等による発掘件数が年とともに増加の傾向を示しているということは、一方では新たな事実の解明が進むことではありますが、また一方では、それに伴って遺跡が消滅するということにもなります。

このような状況の中で、本市といたしましても、市民や工事関係者の方々などの格別の御協力をいただきながら、保存し得る遺跡は可能な限り保存し、直接保存し難い遺跡については、その状態をできる限り後世に伝えられるように努めてまいりました。

この発掘調査概報は、昭和57年度国庫補助事業として実施した発掘調査の結果をまとめたもので、これが今後ながく活用されるよう念願しています。

おわりに、調査に当たって御協力、御援助をいただいた文化庁をはじめとする関係各位、市民のみなさま方に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、昭和57年度文化庁国庫補助事業における中臣遺跡発掘調査の概報である。
- 2 発掘調査は、京都市文化観光局が財団法人 京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 発掘調査は2箇所実施した。調査次数は、52次・53次である。
- 4 図中に使用した方位は、平面直角座標系（VI）による。
- 5 標高は、海拔高T.P.を用いた。
- 6 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行都市計画基本図（2500分の1）・勸修寺を修正して使用した。
- 7 本文中の写真は、遺構・遺物とも牛嶋 茂が撮影した。
- 8 本書の執筆・校正は、平方幸雄、辻 裕司が行なった。

目 次

I 52次調査……………	1	II 53次調査……………	11
1 調査経過……………	1	1 調査経過……………	11
2 遺構……………	1	2 遺構・遺物……………	12
3 遺物……………	7	3 小結……………	12
4 小結……………	10	III まとめ……………	13

図 版 目 次

図版 1 遺跡 調査位置図	図版 7 遺跡 1 52次全景
図版 2 遺跡 52次調査区周辺主要遺構位置図	2 S K 1
図版 3 遺跡 53次調査区周辺主要遺構位置図	図版 8 遺跡 1 1号住居址全景
図版 4 遺跡 縄文時代主要遺構位置図	2 同遺物出土状況
図版 5 遺跡 弥生・古墳時代主要遺構位置図	図版 9 遺跡 1 2号住居址全景
図版 6 遺跡 航空写真	2 4号住居址全景
	図版 10 遺跡 1 5号住居址全景
	2 6号住居址全景
	図版 11 遺跡 53次全景

図版12 遺跡 1 1号住居址全景
2 同遺物出土状況

図版13 遺物 S K 1・1号住居址・4
号住居址出土土器

図版14 遺物 1号住居址・4号住居址出土
土器

図版15 遺物 1号住居址・4号住居址出土
土器

挿 図 目 次

図1 調査区平面図…………… 1

図2 1号住居址…………… 2

図3 2号住居址…………… 3

図4 3号住居址…………… 4

図5 4・5号住居址…………… 5

図6 6号住居址…………… 6

図7 6号住居址カマド…………… 7

図8 S K 1…………… 7

図9 S K 1・1号住居址出土土器…………… 8

図10 4号住居址出土土器…………… 9

図11 調査区実測図…………… 11

I 52次調査

1 調査経過

今回の調査地点は山科区西野山中臣町68番地B及び山科区勸修寺西金ヶ崎96番地Bに所在する。当該地が駐車場として埋め立てられるに伴い事前に発掘調査を実施した。調査地点は栗栖野丘陵より旧安祥寺川に向かって緩傾斜を呈しつつ広がる低位段丘部のほぼ中位に位置する。

当該地周辺におけるこれまでの発掘調査は市街化道路及び宅地などに対し、昭和48年度以降2次・3次・5次・7次・8次・35次調査などが実施されており(図版二)、その結果、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居

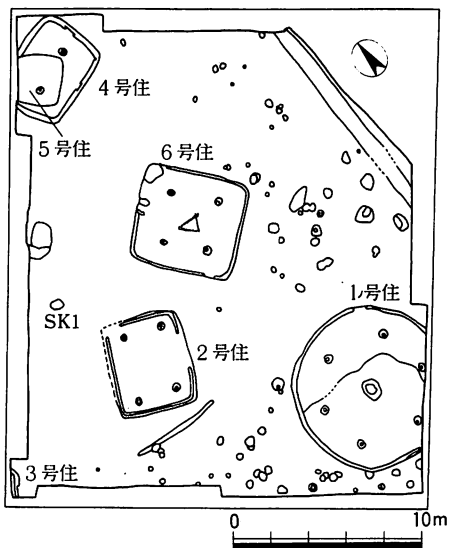


図1 調査区平面図

址・土壇等、古墳時代後期以後の竪穴住居址・掘立柱建物等が多数検出されている。このように周辺部には遺構が密に展開していることから、今回の調査においても当該期の遺構を多く検出することが予測できた。

調査対象地の面積は約490㎡あり、ほぼ対象地全域にわたって調査を実施した。調査区の基本層序は耕土及び床土が25～50cmあり、その直下が地山である。遺物包含層は水田耕作時に全て削平されたと考えられ、検出していない。

2 遺構

遺構は調査区全面に展開しており、全て地山面で検出した。主な遺構として、埋葬1基、竪穴住居址6戸がある。その他土壇及びピット多数を検出した。

1号住居址 調査区の南隅で検出した。住居址の南東部は調査区外にあり、その部分については未調査である。平面形はやや角張った円形を呈し、規模は検出面で東西8.54mあり、検出面から床面までの深さ21～27cmある。住居址の北半には孤状を呈するベッド状の高まり部があり、南半より6cm高まる。壁溝はほぼ全周し、幅14～24cm、床面からの深さ4～8cmある。主柱穴は6箇所あり、平面形はほぼ円形を呈し、径約40cm、深さ56～74cmあり、それぞれ径16cmの柱当たりを有する。柱間隔はP1より右回りで2.64・2.84・3.20・

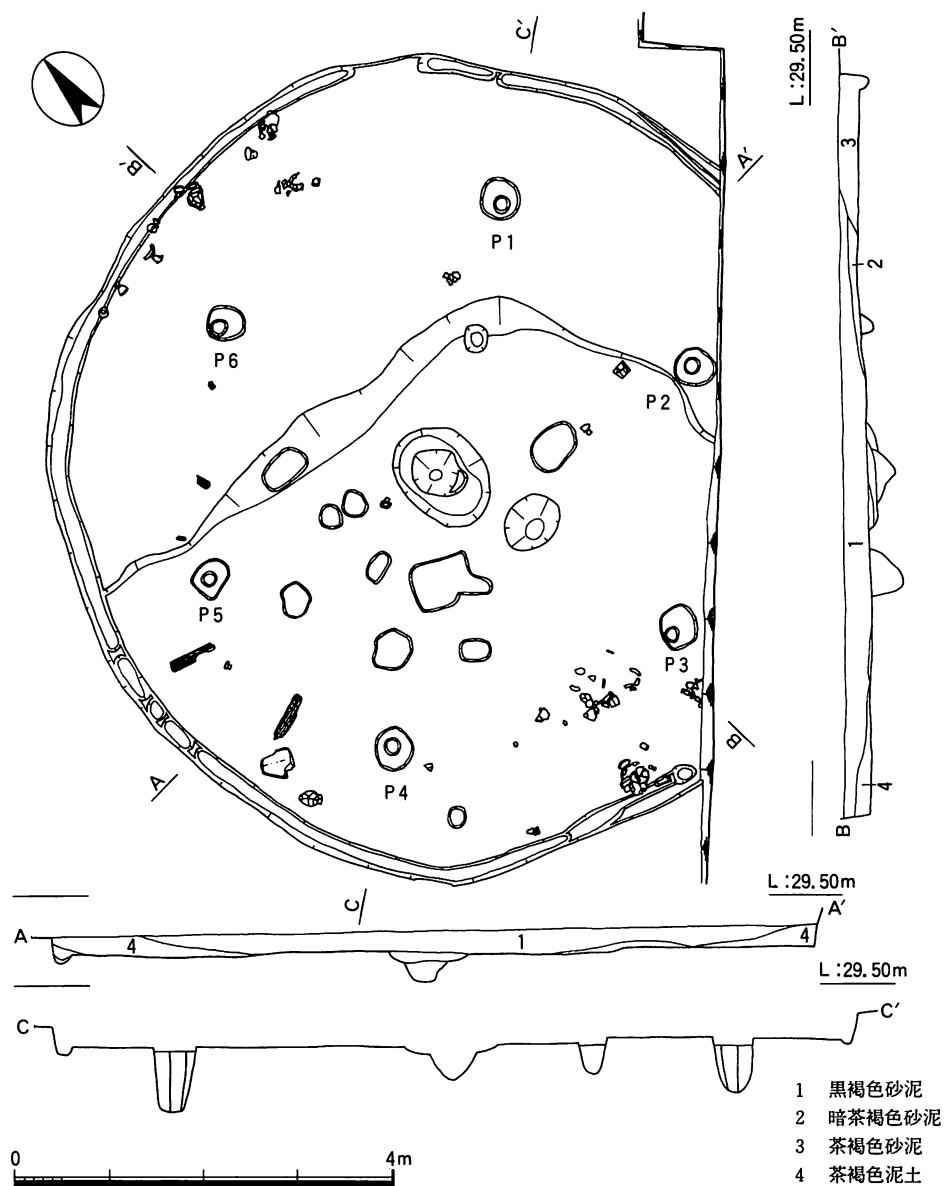


図2 1号住居址

2.64・2.68・3.28mある。床面中央には南北116cm、東西88cmの楕円形を呈するピットがある。2段落ちで中央部の断面形は摺鉢状を呈して、床面からの深さ38cmある。炭化木材が5箇所あり放射状を呈する。遺物は床面及びベッド状高まり部で壺・甕・脚台付鉢・高杯・ミニチュア土器(図9 3~20)・手焙形土器・砥石・工作台と思われる自然石などが出土した。

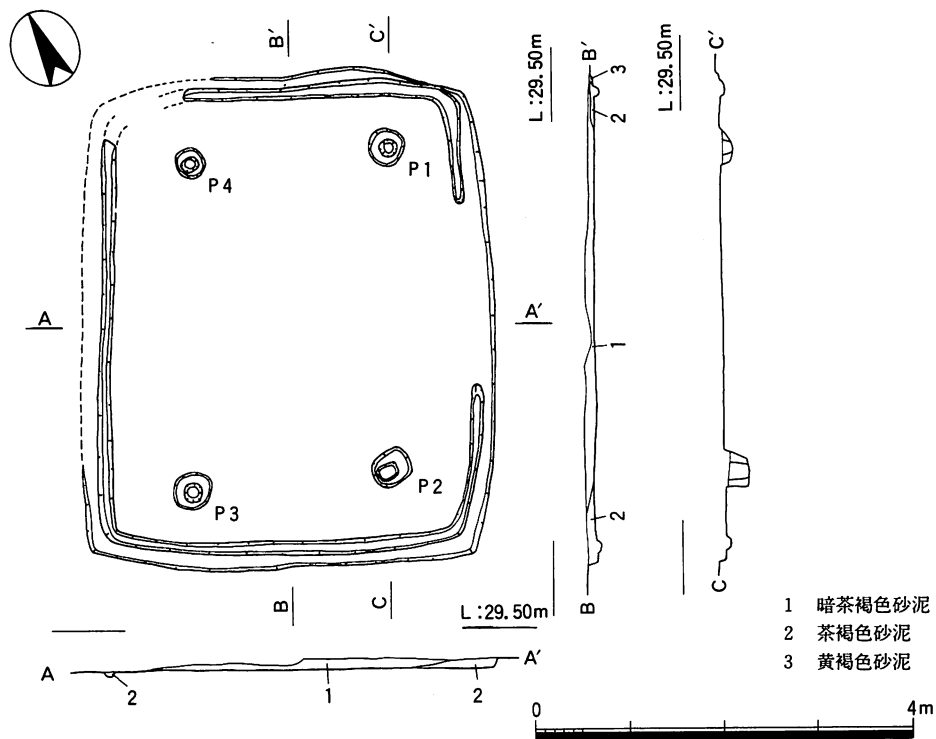


図3 2号住居址

2号住居址 調査区の中央やや西寄りの位置で検出した。平面形は北東—南西に長い長方形を呈する。西壁及び北壁の一部が削平を受けているが、検出面での規模は長軸5.20m、短軸4.40m（復元長）ある。検出面から床面までの深さ12cmある。壁溝は壁体部よりそれぞれ北壁から10cm、西壁から16cm、南壁から10～16cm、東壁から8～16cm中央寄りに巡る。なお壁溝は東壁の中央部分で長さ約1.9m途切れる。幅10～18cm、床面からの深さ6cmある。支柱穴は4箇所ある。平面形はほぼ円形を呈し、径32～44cm、床面からの深さ12～26cmあり、それぞれ径16～20cmの柱当たりを有する。柱間隔はP1より右回りで3.44・2.12・3.46・2.12mある。遺物は、床面から壺・甕・高杯・手焙形土器などの小片が少量出土した。

3号住居址 調査区の西端で検出した。調査区の北西に接する宅地の調査（35次調査：2号住居址）及び南西に接する道路部分の調査（3次調査：11号住居址）でそれぞれ検出した竪穴住居址の東隅部であり、今回の検出分を合わせ1戸の竪穴住居址を完掘したことになる。これまでの調査結果を総合すると、平面形は方形を呈し、長軸6.40m、短軸6.28

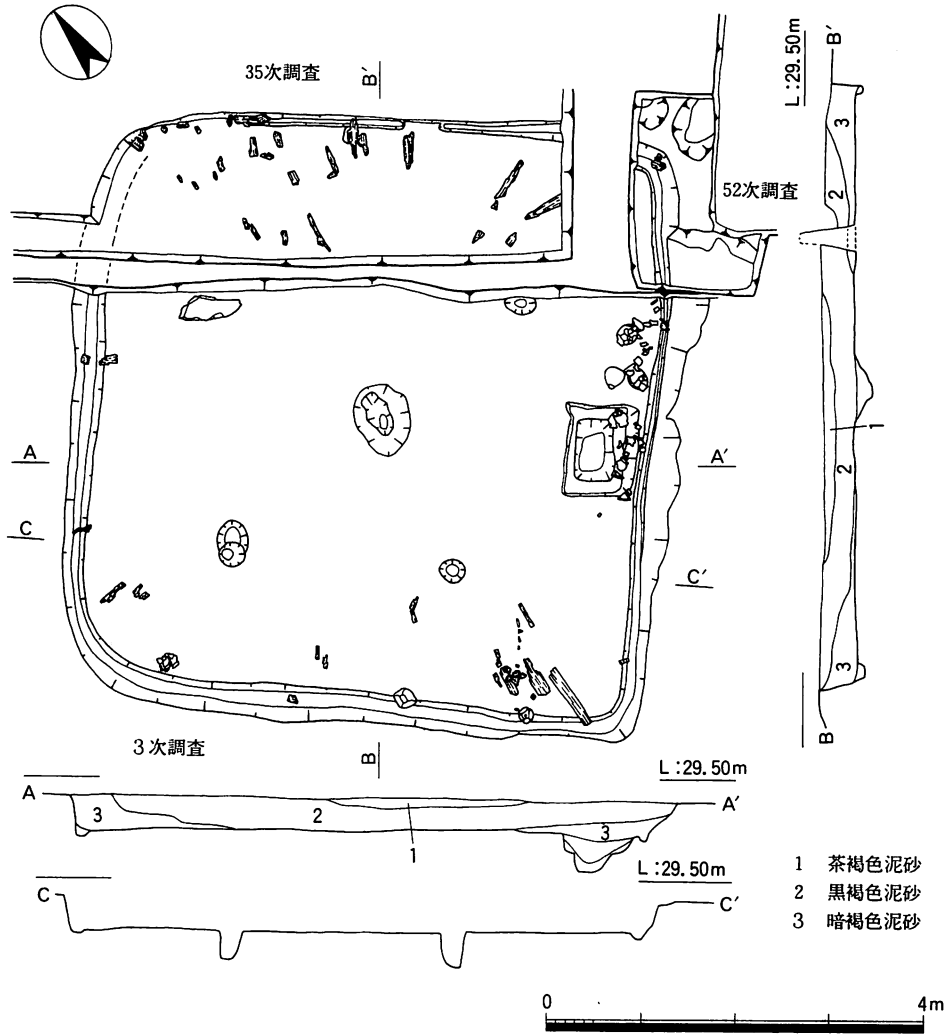


図4 3号住居址

m、検出面からの深さ32~40cmある。壁溝はほぼ全周し、幅12~32cm、床面からの深さ6~10cmある。支柱穴は4箇所あると考えられるが、北側柱穴に関しては未検出である。床面中央のピットは平面形が不整楕円形で2段落ちを呈し、長径78cm、短径60cm、床面からの深さ20cmある。南東壁に接して平面形が方形の貯蔵穴があり2段落ちを呈する。長軸96cm、短軸76cm、床面からの深さ41cmある。この住居址は火災に遇っており、床面で方射状に分布する多量の炭化木材を検出した。遺物は貯蔵穴及び周辺の床面で壺・甕・高杯・器台・手焙形土器などが出土した。

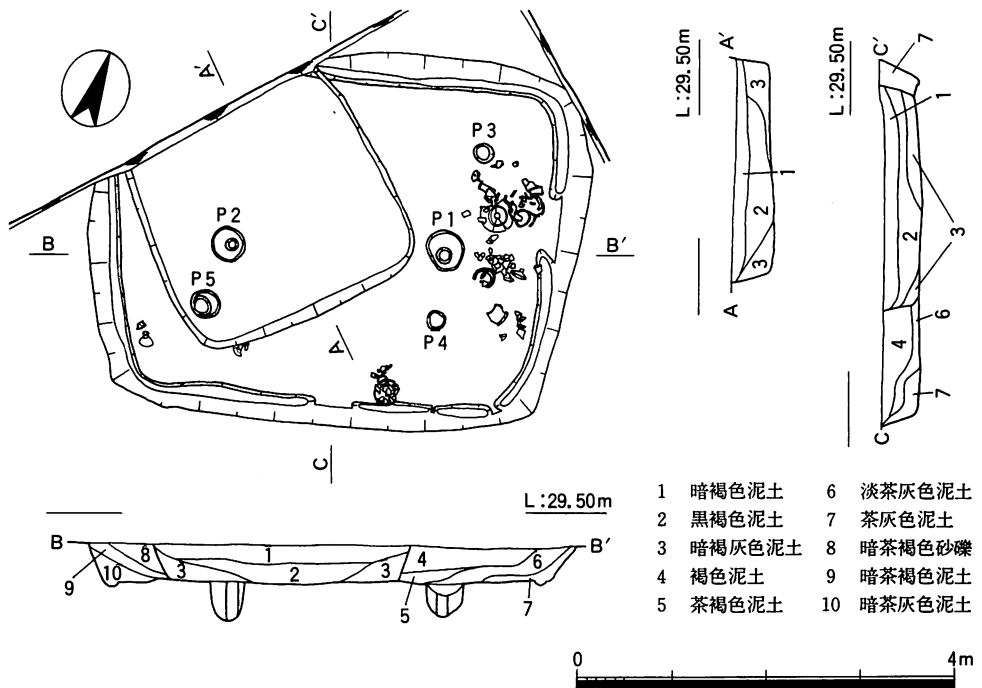


図5 4・5号住居址

4号住居址 調査区の北端で検出した。平面形は東西に長い長方形を呈する。北西隅部分は調査区外にあり未調査である。検出面での規模は長軸5.20m、短軸3.92mある。検出面から床面までの深さ38～42cmある。壁溝は東壁及び南壁の一部で途切れる他はほぼ全周すると思われ、幅12～20cm、床面からの深さ4～6cmある。支柱穴は中央、東西方向に2箇所ある。平面形はほぼ円形を呈し、径36～44cm、床面からの深さ36～42cmあり、それぞれ径13～16cmの柱当たりを有する。P1—P2間は2.28mある。なおP1から北へ116cmでP3、南へ70cmでP4を、P2から南へ74cmでP5を検出した。平面形は円形で径18～22cm、床面からの深さ5～12cmある。P1・2に比べ規模が小さく、また位置関係から見て補助柱ないしは支柱と考えられる。遺物は南及び東側壁溝付近の床面にほぼ密着した状態で、壺・高杯(図10)・甕などが出土した。

5号住居址 4号住居址を掘り下げて構築し、4号住居址の中央から北西にかけて検出した。北西壁は調査区外にあり未調査である。平面形は方形を呈すると考えられる。検出面での規模は北東—南西間で2.64mある。床面は4号住居址の床面を使用し、検出面からの深さは40～42cmある。壁溝及び支柱穴は検出せず、本来それらの施設を有しなかったと考えられる。遺物は床面よりやや浮いた状態で壺などの小片が出土した。

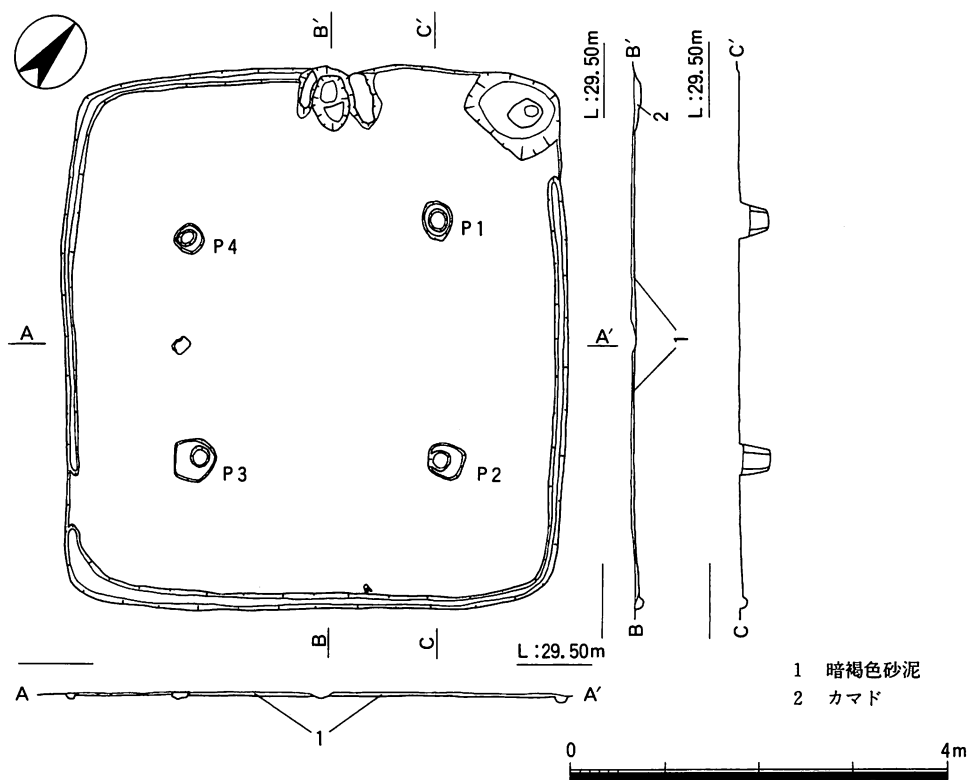


図6 6号住居址

6号住居址 調査区のほぼ中央で検出した。平面形は方形を呈し、北西壁中央にはカマドを、北隅には貯蔵穴をそれぞれ付設する。住居址の検出面での規模は北東—南西間5.36m、北西—南東間5.72mあり、検出面から床面までの深さ2~4cmある。壁溝はカマドより貯蔵穴までの間を除きほぼ全周する。幅12~22cm、床面からの深さ6~7cmある。支柱穴は4箇所ある。平面形はほぼ円形を呈し、径30~46cm、床面からの深さ32cmあり、それぞれ径16~24cmの柱当たりを有する。柱間隔はP1より右回りで2.54・2.54・2.36・2.60mある。カマドは袖部及び焚口部を検出した。規模は66×89cmあり、床面から焚口部底までの深さ26cmある。焚口部内上層は焼土・灰・炭、下層は灰・炭からなる。貯蔵穴は平面形が方形で2段落ちを呈する。床面での規模は南北76cm、東西106cmあり、床面から中位までの深さ16cm、底まで26cmある。埋土は2層あり上層は焼土・灰・炭からなるが、壁面は焼けていない。またこの層から土師器長甕等が集中して出土した。この他床面より土師器甕等の小片が出土した。

SK1 調査区の西寄り中央付近で検出した埋甕である。土坑掘形の平面形は北西—南東に長い楕円形を呈し、長径68cm、短径50cm、検出面からの深さ9~11cmある。埋土は茶褐色砂泥層である。埋甕は深鉢形土器(図9 1)胴部の底部付近を穿孔して転用している。土坑の中央部に口縁部をやや斜め上にして土坑底より僅かに浮く状態で埋めている。他の深鉢形土器(図9 2)の口縁部約2分の1を倒立した状態で蓋として転用している。

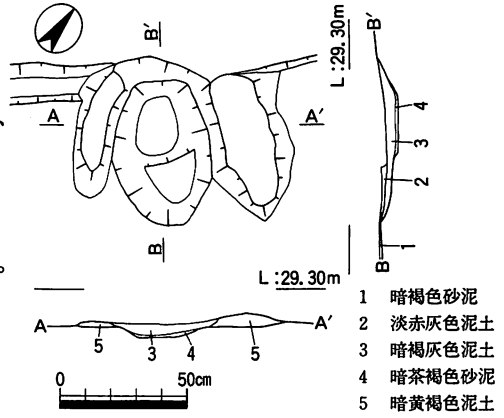


図7 6号住居址カマド

3 遺物

遺物は各遺構から縄文土器・弥生土器・土師器・砥石・鉄片などが遺物整理箱で12箱出土した。このうちSK1・1号及び4号住居址から出土した主な土器を図示した。

縄文土器

深鉢(1・2) 口縁部は、内傾しつつ上半で直立する1と、内傾する2がある。1は体部がくの字形を呈し最大径は肩部にあり、平底である。口縁端部及び肩部に幅の狭い突帯を貼り付け、突帯上に刻目をつける。1は体部外面を縦方向に軽いケズリを行なうが、底部付近は縦方向のナデを行なう。内面は横方向のナデを行なう。2は内外面ともナデを行なう。1は口径35.2cm、器高50.5cmある。2は口径26.2cmある。なお1は体部の底部付近に焼成後、穿孔を行なっている。

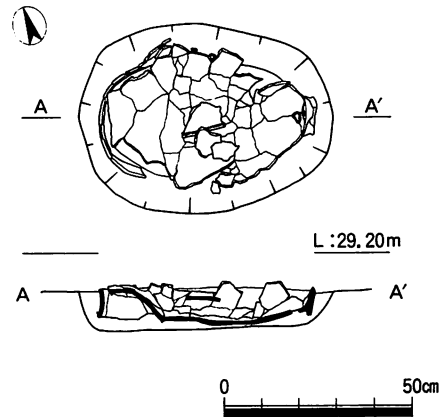


図8 SK1

3~4世紀

3~4世紀

壺(3~6・21~24) (3・4)は最大径が胴部上半にあり、僅かに開く短い口縁部からなる。3・4とも体部外面上半はハケメ、下半はナデ、内面は3がナデ、4がハケメ調整する。口縁部はナデを行なう。肩部には刺突文を巡らせ、3は刺突文下にヘラによる記号文様を施す。口径10.0・9.8cm、器高23.2・21.4cmある。(5・6・24)口縁部が外上方に立ち上がり、端部は外方に開く。体部は5が扁平、6・24が球形を呈する。5・6・24とも

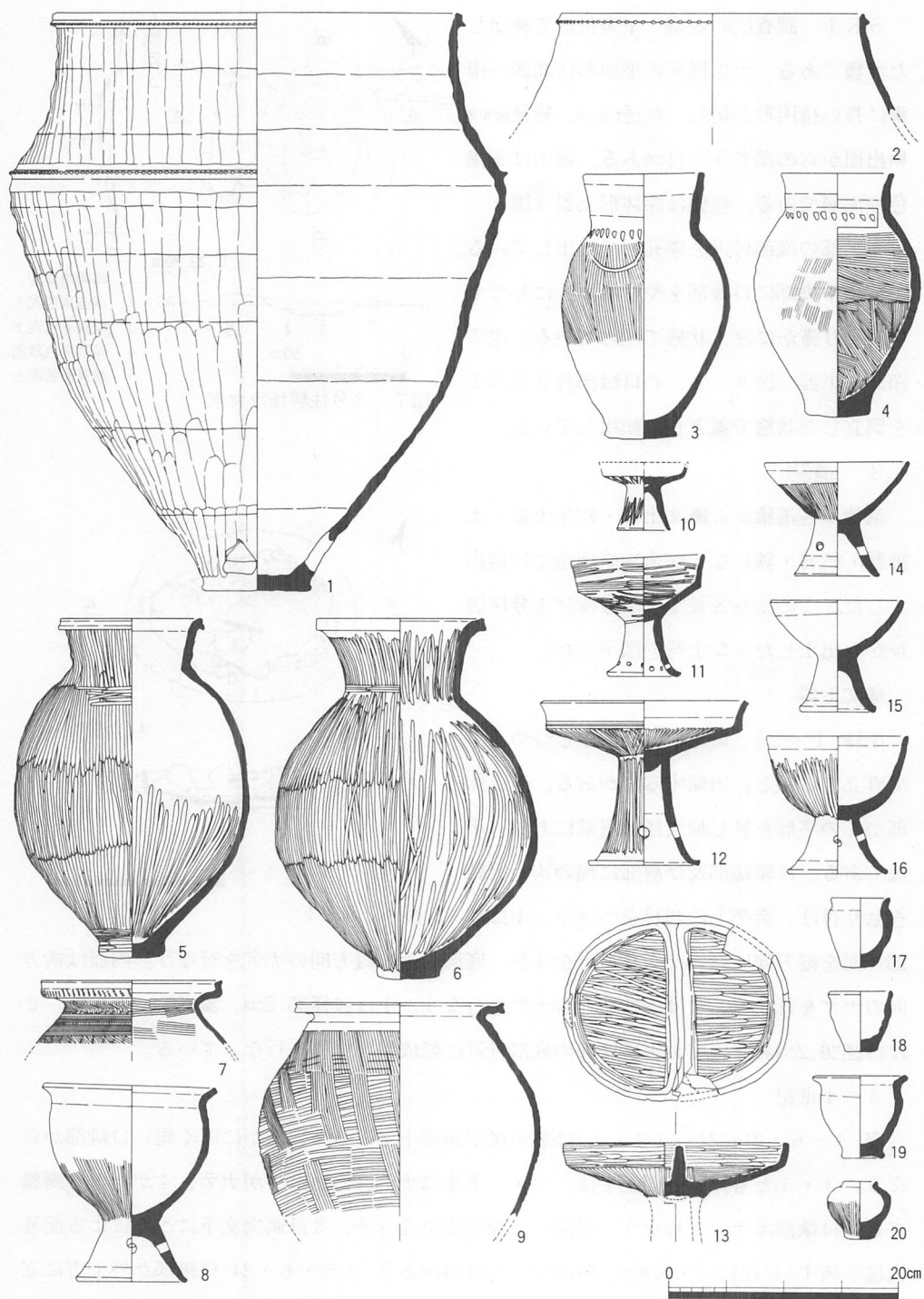


图9 SK 1·1号住居址出土土器

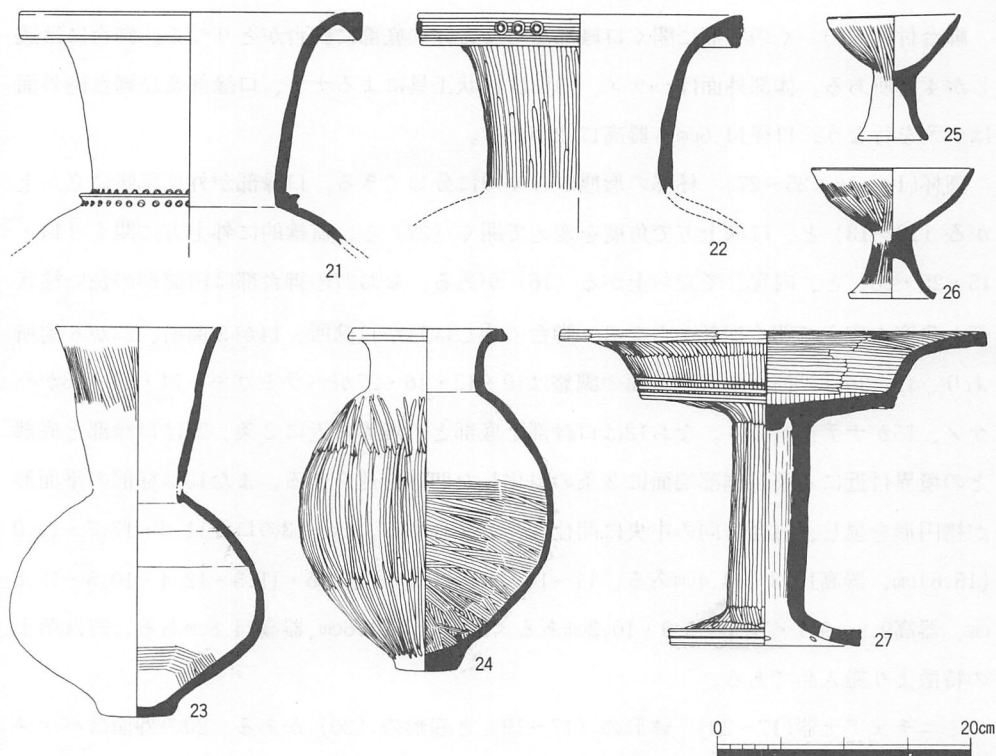


図10 4号住居址出土土器

外面はヘラミガキ、内面は5が下半をヘラミガキ、上半をナデ、6がヘラミガキ、24が体部下半をハケメ、上半を板状工具によるとみられるナデを行なう。口径10.1・14.4・11.8 cm、器高29.8・31.3・28.0cmある。(21・22)は口縁部が外上方に開き、端部を下方に拡張する。21は頸部に突帯を貼り付け、突帯の上・下段に円形竹管文を巡らす。22は口縁端面に4条の凹線を巡らし、凹線上に3個1単位の円形浮文を6箇所配する。器面が相当剥落している為、僅かに22の外面にヘラミガキが認められるのみである。口径27.0・25.6cmある。胎土の特徴より搬入品である。(23)は外上方に開く長い口縁部と底部付近で急激にすぼまる体部からなる。器面は相当剥落しており、内外面の一部にハケメ調整が認められるのみである。口径13.2cm、器高31.0cmある。

甕(7・8) 7は受け口状の口縁部を呈し、内外面ともハケメ調整する。肩部に横方向のハケメ原体によると考えられる平行線文を2箇所施し、平行線文下方及び口縁下端には刺突文を施す。口径15.8cmある。8は口縁部が水平方向に開き、端部をつまみ上げる。口縁端面に凹線を一条巡らす。外面はやや斜め方向のタタキメの上をハケメ調整する。内

面は浅いへラケズリを行なう。口径18.0cmある。

脚台付鉢(9) くの字形に開く口縁部からなる鉢の底部に脚台がとりつく。脚台には透しが4箇所ある。体部外面はハケメ、内面は板状工具によるナデ、口縁部及び脚台内外面はナデを行なう。口径14.6cm、器高17.2cmある。

高杯(10~16・25~27) 杯部の形態から4種に分類できる。口縁部が外反気味に立ち上がる(10~13)と、口縁上方で角度を変えて開く(27)と、直線的に外上方に開く(14・15・25・26)と、内弯して立ち上がる(16)がある。なお27の脚台部は円筒形の長い柱状部と角度を変えて開く裾部からなる。脚台の透しは11が11箇所、14が3箇所、27が6箇所あり、12・16は4箇所ある。外面の調整は10~13・16・27がへラミガキ、14・25・26がハケメ、15がナデを行なう。なお12は口縁部と底部との境界付近に2条、27は口縁部と底部との境界付近に4条、裾部端面に2条の退化した凹線を巡らせる。また13は杯部の平面形が楕円形を呈し、短径方向の中央に間仕切りを接合する。11~13の口径11.6・17.7・19.0(15.6)cm、器高10.3・14.4cmある。14~16・25・26は口径12.6・11.5・12.4・10.5・12.8cm、器高9.9・9.7・12.0・9.9・10.3cmある。27は口径34.6cm、器高24.8cmある。27は胎土の特徴より搬入品である。

ミニチュア土器(17~20) 鉢形の(17~19)と壺形の(20)がある。20の外面はハケメ調整する。口径5.0・5.3・7.9・2.8cm、器高6.0・5.2・7.2・5.0cmある。

4 小結

今回の調査で検出した各遺構の時期は、埋甕が縄文時代晩期、1~5号住居址が3~4世紀、6号住居址が6世紀後半~7世紀前半である。

4号住居址より出土した遺物には、壺・高杯(21・22・27)のように河内地方からの搬入品と考えられる一群の土器と、壺(23)のように東海・近江地方の強い影響を受けた土器が相伴しており、中臣遺跡の当時の在り方を探る上で極めて興味深い事例である。

1~5号住居址の平面形には、方形及び円形を呈する2種類がある。方形を呈する竪穴住居は一辺2.6~6.4m、円形のもの径8.5mあり規模・形態等に差異が認められる。

旧安祥寺川に面する低位段丘上では縄文時代の遺構についてはこれまで僅かに後期の土壇が2基検出されているのみであり、晩期の埋甕を今回初めて検出したことになる。弥生時代~古墳時代の竪穴住居址は今回の調査地点の東・西・北部に多くあるが、南接する8次調査地点から旧安祥寺川にかけては竪穴住居址等の遺構は検出されておらず、水田等が営まれたと考えられる。

II 53次調査

1 調査経過

今回の調査地点は山科区勸修寺東金ヶ崎22番地2に所在する。当該地が駐車場として埋め立てられることに伴い、事前に発掘調査を実施した。調査地点は栗栖野丘陵西南先端部付近よりゆるやかな傾斜を示しながら、旧安祥寺川に至る低位段丘部のやや丘陵寄りの地点に位置する。

当該地周辺の市街化道路及び宅地に対し、昭和50年度以降6次・10次・28次・41次・46次調査等が実施されており（図版三）、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址・土壇等、古墳時代後期の竪穴住居址・掘立柱建物等、奈良～平安時代中期の掘立柱建物・井戸等多数の遺構が検出されている。このように周辺部の遺構のあり方などからみて、当該地にも竪穴住居址等、なんらかの遺構が存在するであろうと予測できた。また、当該地に東接する41次調査では飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・溝の一部を調査している。今回の調査区にその未調査部分が延長しており、それらに対して調査を行なった。

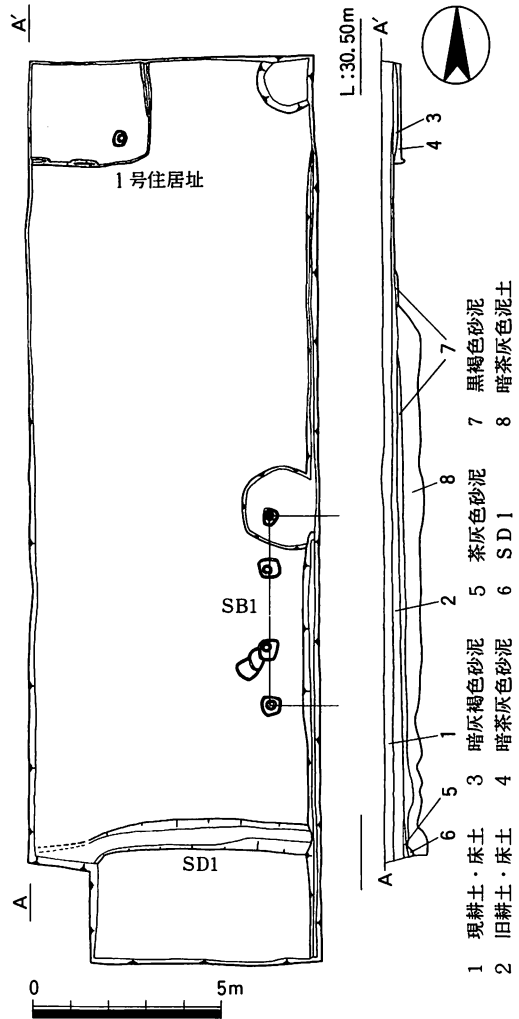


図11 調査区実測図

調査対象地の面積は約190㎡あり、ほぼその全面を調査した。調査区の基本層序は現耕土・床土及び旧耕土・床土が約50cmあり、調査区内の北側約3分の1ではその直下が地山である。それより南側には床土下に黒褐色砂泥層が10～25cm、暗茶灰色泥土層が20～60cmあり、南西に向かって漸次厚く堆積する。なお、暗茶灰色泥土層は粘性を帯びており、湿地と考えられる層である。

2 遺構・遺物

遺構は黒褐色砂泥上面でSD1、暗茶灰色泥土上面でSB1、地山の暗灰褐色砂礫面で1号住居址をそれぞれ検出した。遺物は各遺構及び黒褐色砂泥、暗茶灰色泥土層より遺物整理箱で2箱出土した。なお、黒褐色砂泥層より弥生時代後期～古墳時代後期の土器が、暗茶灰色泥土層より弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土した。

1号住居址 調査区の北東隅で検出した。住居址の大部分は調査区外にあり、今回は南東の一部を調査したことになる。検出した部分の形状からみて、平面形は方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。検出面から床面まで深さ4～16cmある。主柱穴は南東コーナー付近で1箇所検出した。なお、これまでの同時期の住居址のあり方からみて4主柱であろう。本来、住居址の中央部と考えられる調査区北西隅付近で、北西から南東に向かって40×92cmの範囲に、焼土・灰・炭・暗灰黄色泥土からなる、カマドの崩壊により生じたと考えられるブロックを検出した。おそらく、カマドは北壁に付設されていたと考えられる。遺物は南東コーナー付近で、ほぼ南壁に接した床面から土師器長甕が出土した。

SB1 調査区中央よりやや南側、東端付近で検出した2間×3間の掘立柱建物である。なお、41次調査で東半は調査されており、今回は西半を調査したことになる。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺48～54cm、深さ58～63cmある。梁行は4.0m(2.0-2.0m)、桁行は5.0m(1.5-2.0-1.5m)ある。

SD1 調査区南端付近で検出した東西方向の溝で、41次調査の際検出された溝の延長部である。溝の断面形はU字形で、溝底は西に向かって下がっている(高低差約10cm)。検出面で幅50～80cm、深さ13～23cmある。遺物は土師器、須恵器の小片が出土した。

3 小結

検出した遺構の時期は出土した遺物よりみて1号住居址は6世紀後半～7世紀前半、掘立柱建物及び溝は7世紀中頃以降である。掘立柱建物と溝の同時併存は、出土した遺物からは判断できなかった。

調査区南半より以南に黒褐色砂泥、暗茶灰色泥土層は堆積している。この両層は41次調査区の南端付近に認められ、南接した市街化道路17号線(10次調査)でも確認されている。更に南の市街化道路18号線(10次調査)では西端付近(南西へ約100m)で同様な堆積が認められた。調査区の北西約50mの地点(36次調査)では、暗茶灰色泥土層に類似した土質の黒灰色泥土層が認められた。このように当該地周辺より以西には、湿地と考えられる泥土ないしは粘土層が堆積しており、水田等生産の場が想定される。

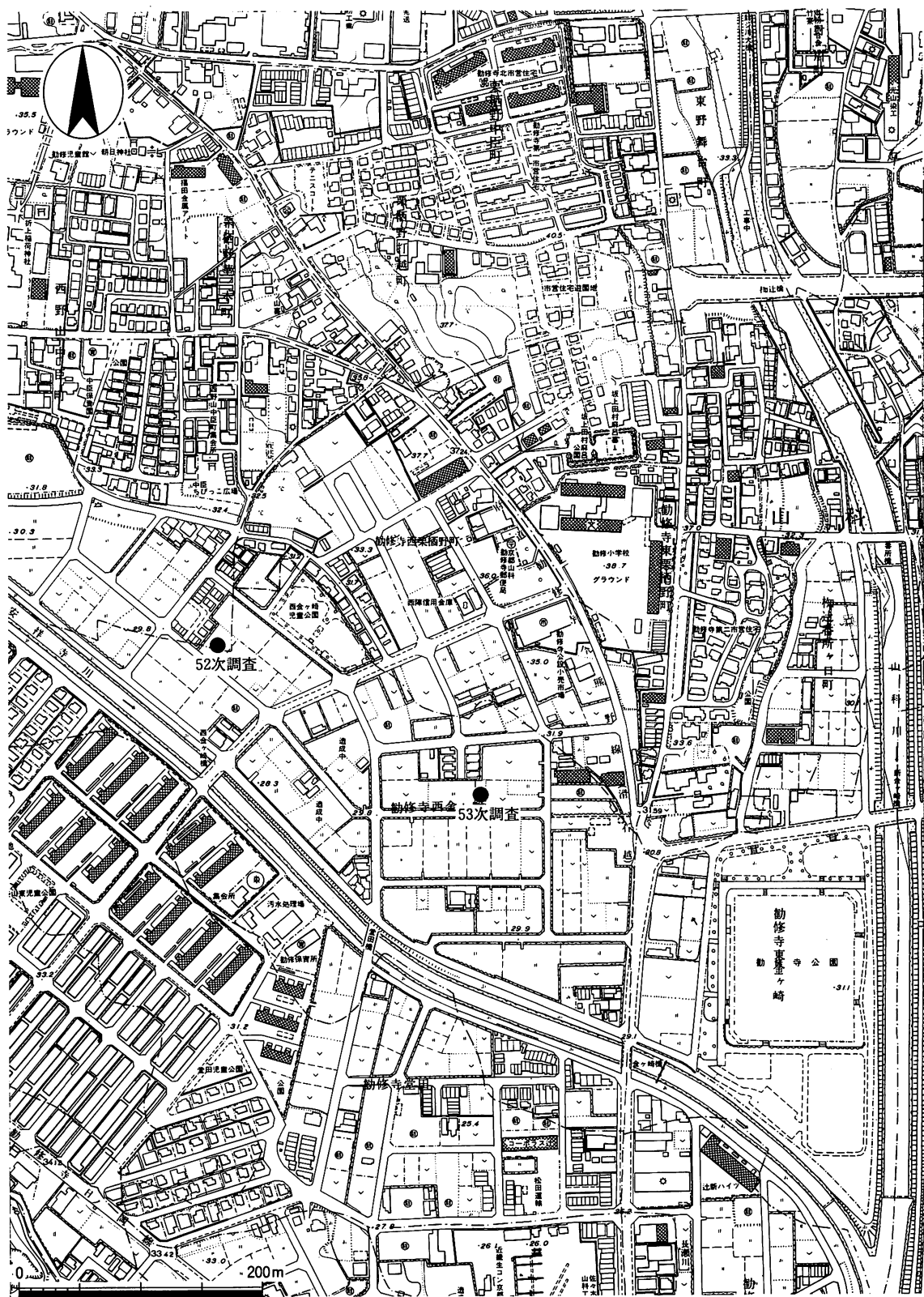
III まとめ

今年度、発掘調査を実施した箇所は52次、53次調査の2箇所である。調査成果をまとめると、主な遺構に縄文時代晩期の埋甕1基、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址5戸、古墳時代後期の竪穴住居址2戸、飛鳥時代以後の掘立柱建物1棟・溝1条などがある。

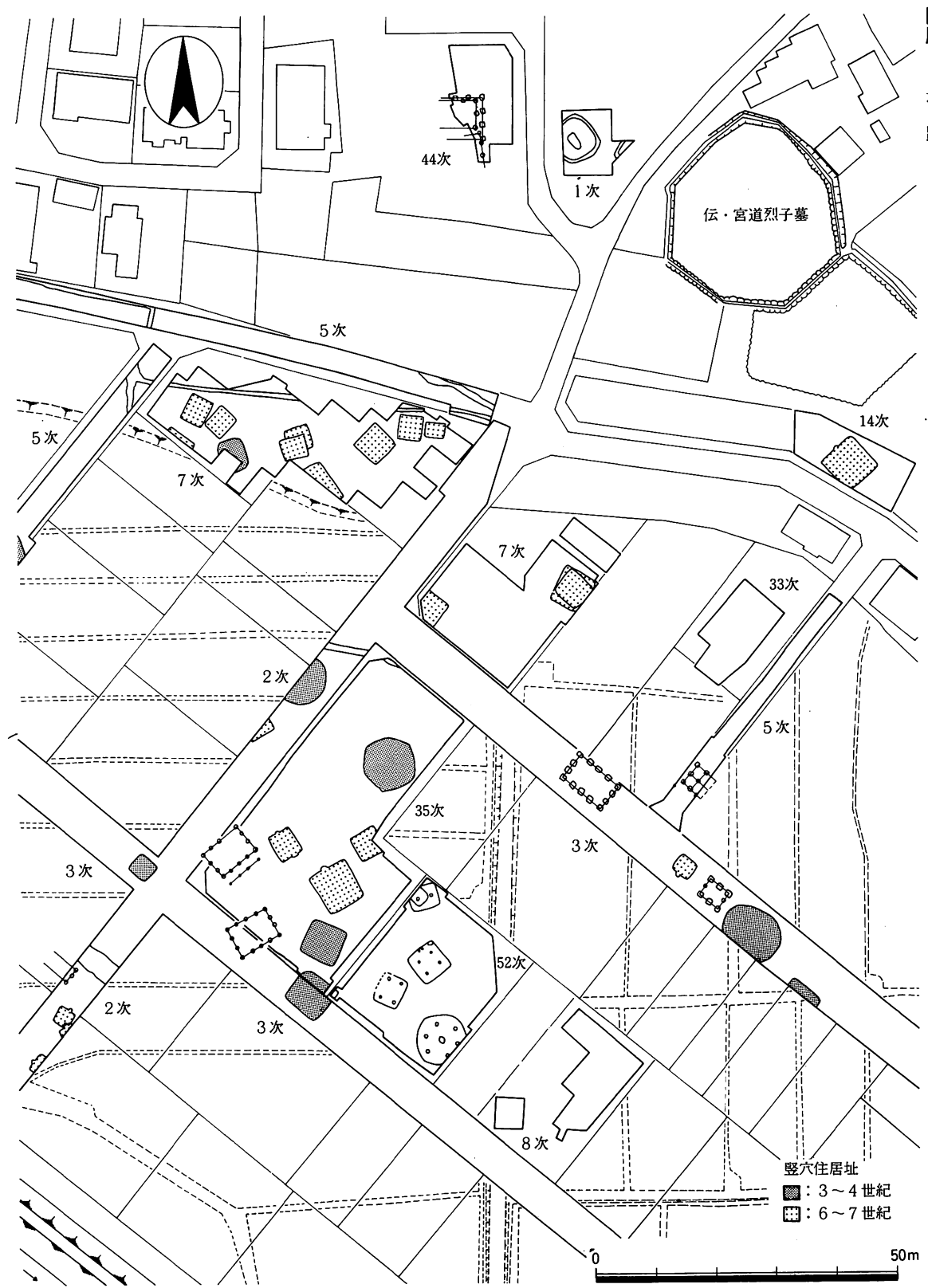
現在までの調査で縄文時代の埋甕および土壇を、栗栖野丘陵をとりまくようにして形成された低位段丘上で検出している。旧安祥寺川に面した低位段丘（西側低位段丘）では3次・6次調査で後期の土壇を検出しているが、晩期の遺構は未検出であった。今年度52次調査で検出した晩期の埋甕はこれまで西側低位段丘で空白となっていた晩期の遺構を埋める資料である。山科川に面した低位段丘（東側低位段丘）では後期の埋甕を49次調査で2基、晩期の埋甕を23次調査で5基、51次調査で3基、晩期の土壇を23次調査で2基検出している。また、東側低位段丘では南から10次・21次・48次・25次・42次・23次・51次各調査で中期～晩期の遺物包含層を検出している(図版 四)。なお、西側低位段丘では遺物包含層は未検出である。このように、縄文時代の遺構・遺物包含層等の実態が徐々に明らかになりつつあるが、たとえば竪穴住居址等、集落に関する遺構は未検出のままであり、縄文時代における中臣遺跡の様相を明らかにする上で十分な資料を得るまでに到っていない。また、縄文時代晩期～弥生時代前期における実態の解明等、今後に残された課題は大きく、重い。

弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址はこれまでの調査で57戸検出している。これら竪穴住居からなる集落は低位段丘上に立地しており、占地の状態から4グループに大別できる。西側低位段丘では52次調査区周辺と53次調査区周辺、東側低位段丘では49次調査区周辺と23次調査区周辺である(図版 五)。なお、北側低位段丘はこれまで1箇所を調査(9次)しているが、当該期の遺構・遺物は検出しておらずその実態についてはまったく不明である。

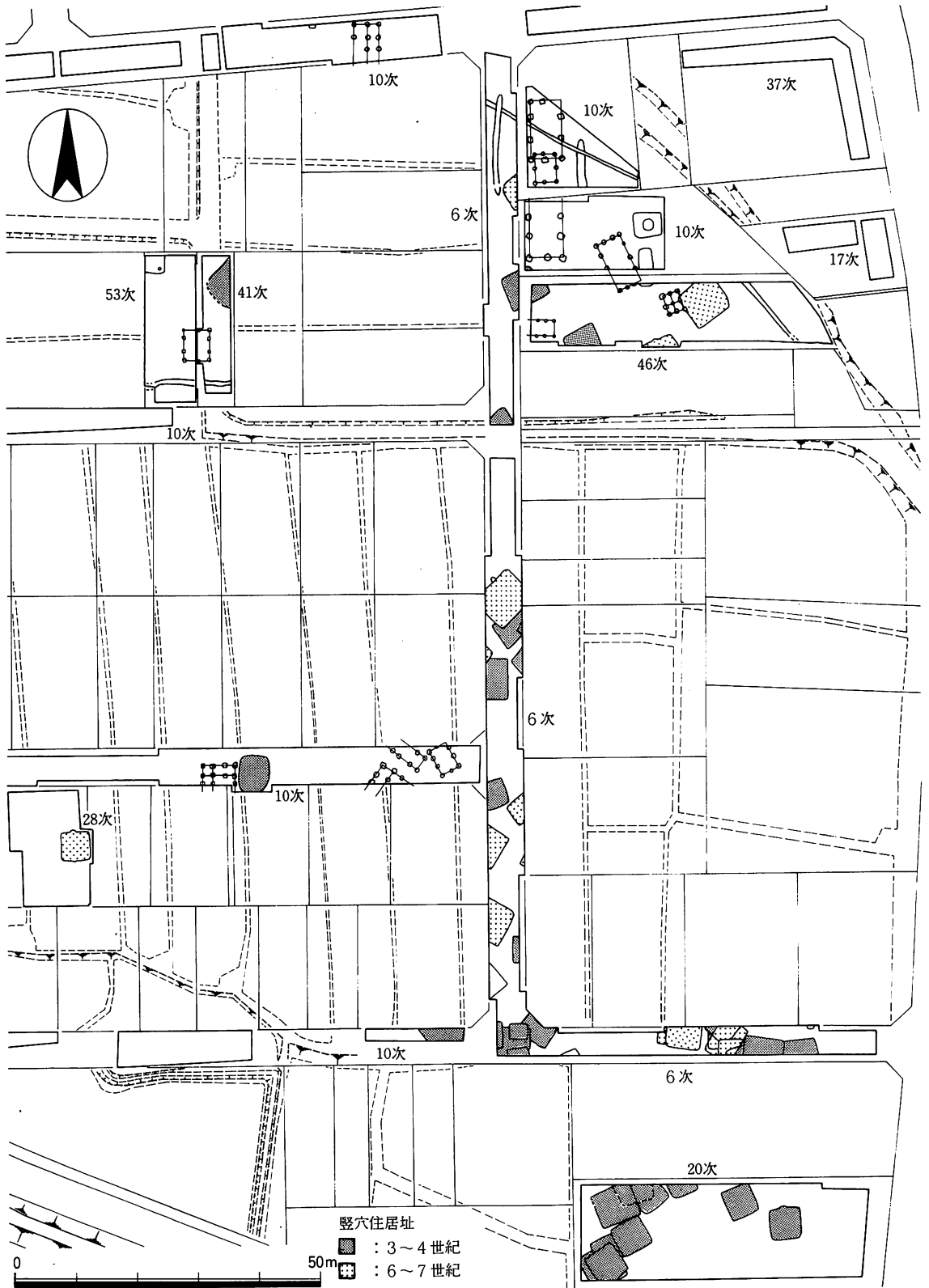
古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴住居址はこれまでの調査で63戸、掘立柱建物跡24棟以上を検出している。これら竪穴住居と掘立柱建物からなる集落は低位段丘および丘陵に立地しており、占地の状態から5グループに大別できる。低位段丘上のグループは弥生時代後期～古墳時代前期のグループとほぼ重複した位置にあるが、この時期になって丘陵斜面部に新たに1グループ(43次調査区周辺)が形成される。



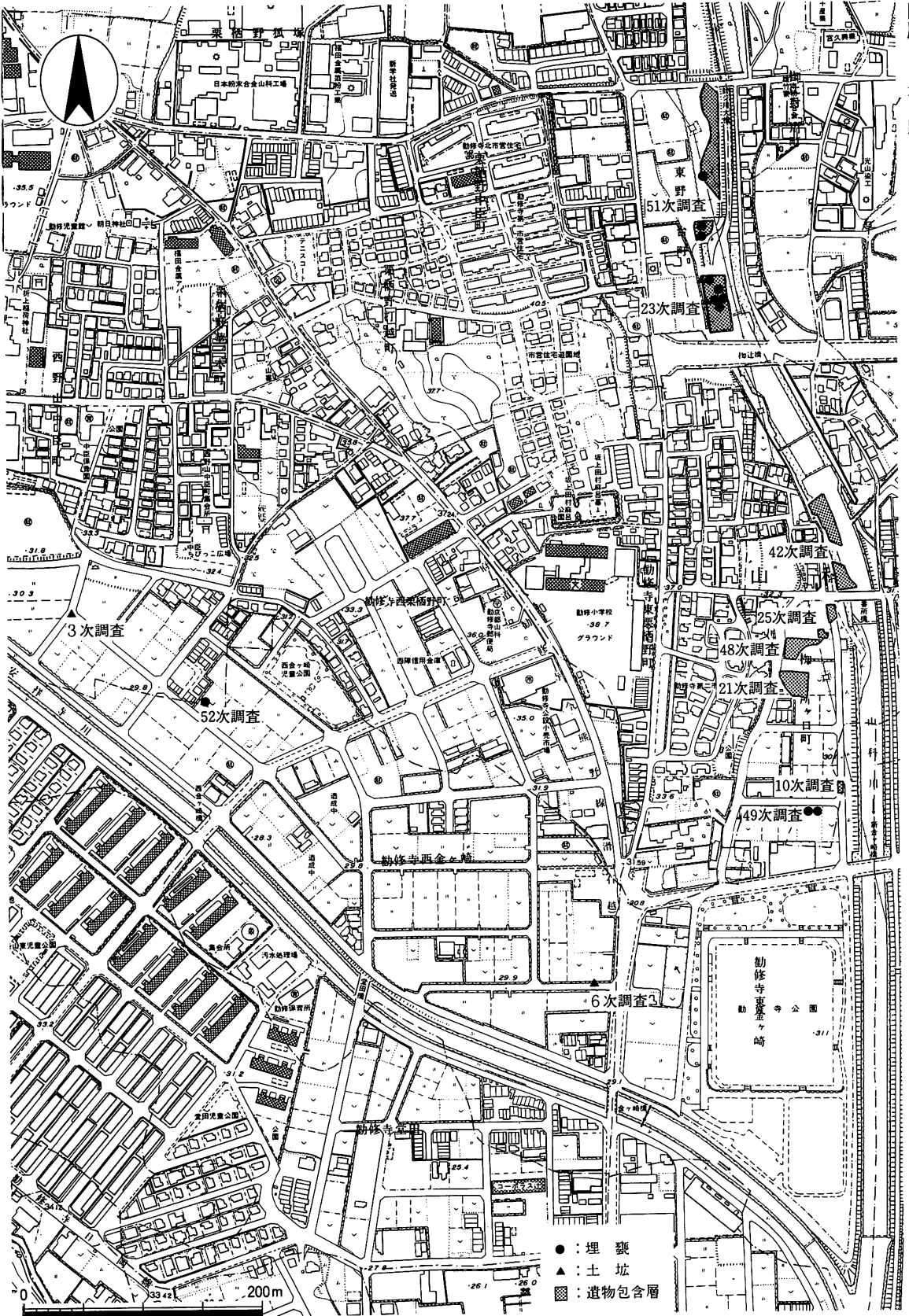
調査位置図



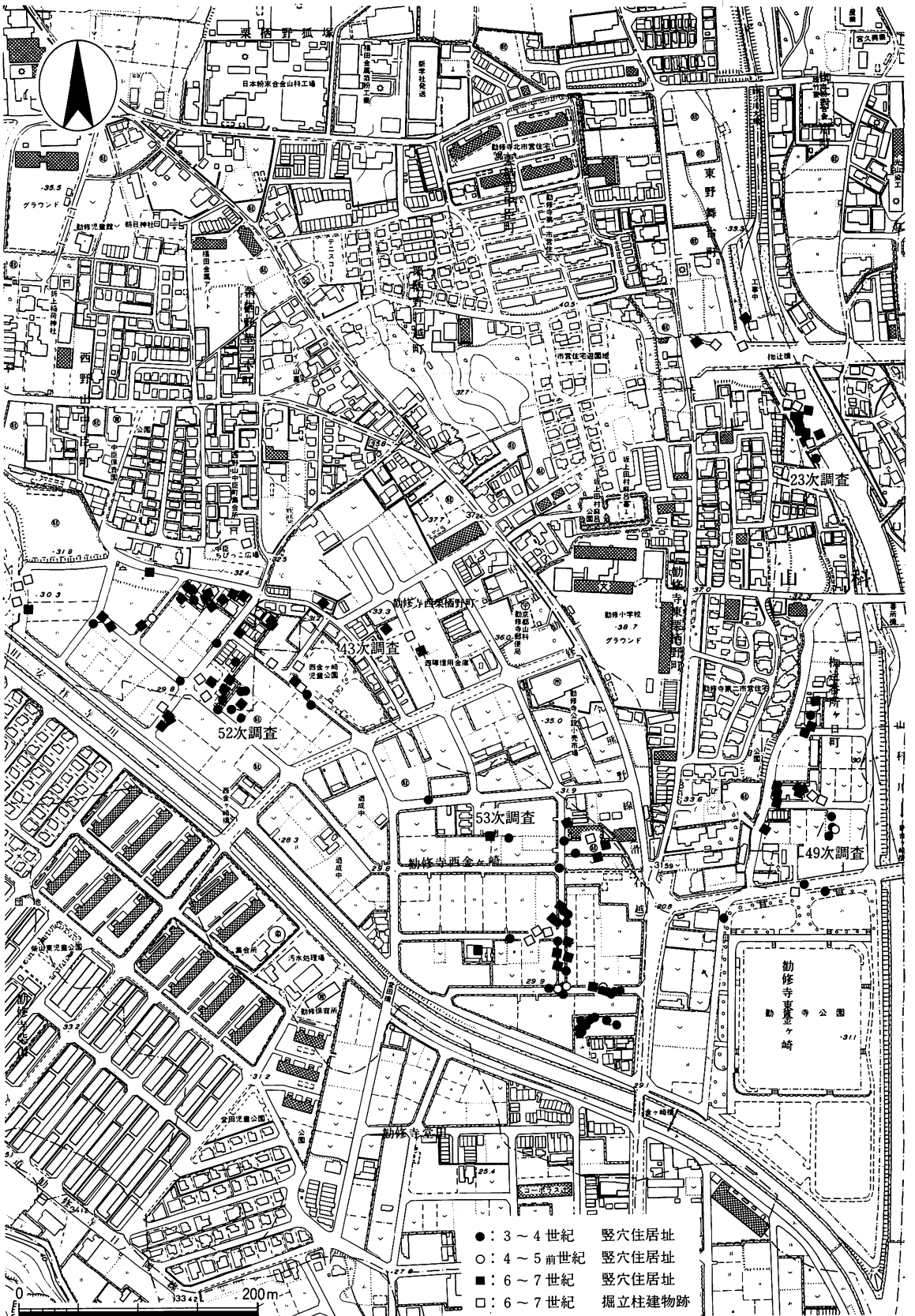
52次調査区周辺主要遺構位置図



53次調査区周辺主要遺構位置図



縄文時代主要遺構位置図



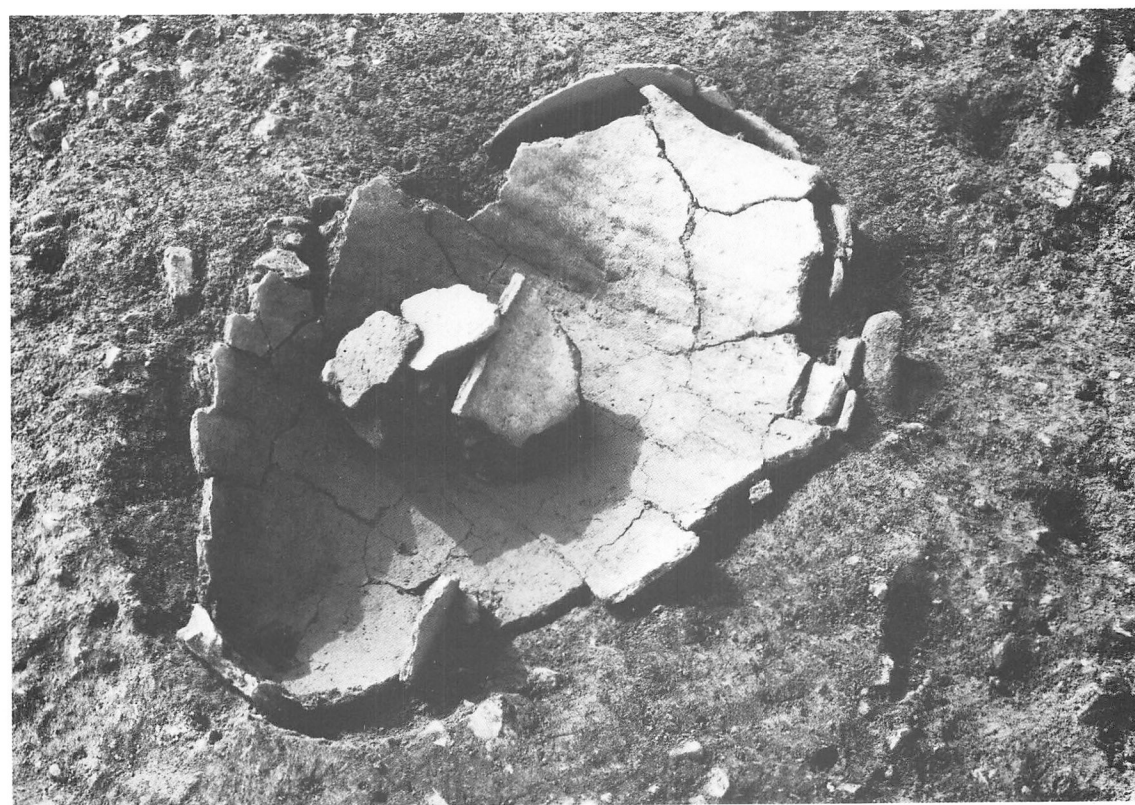
弥生・古墳時代主要遺構位置図



航空写真（昭和52年撮影）



1 52次全景



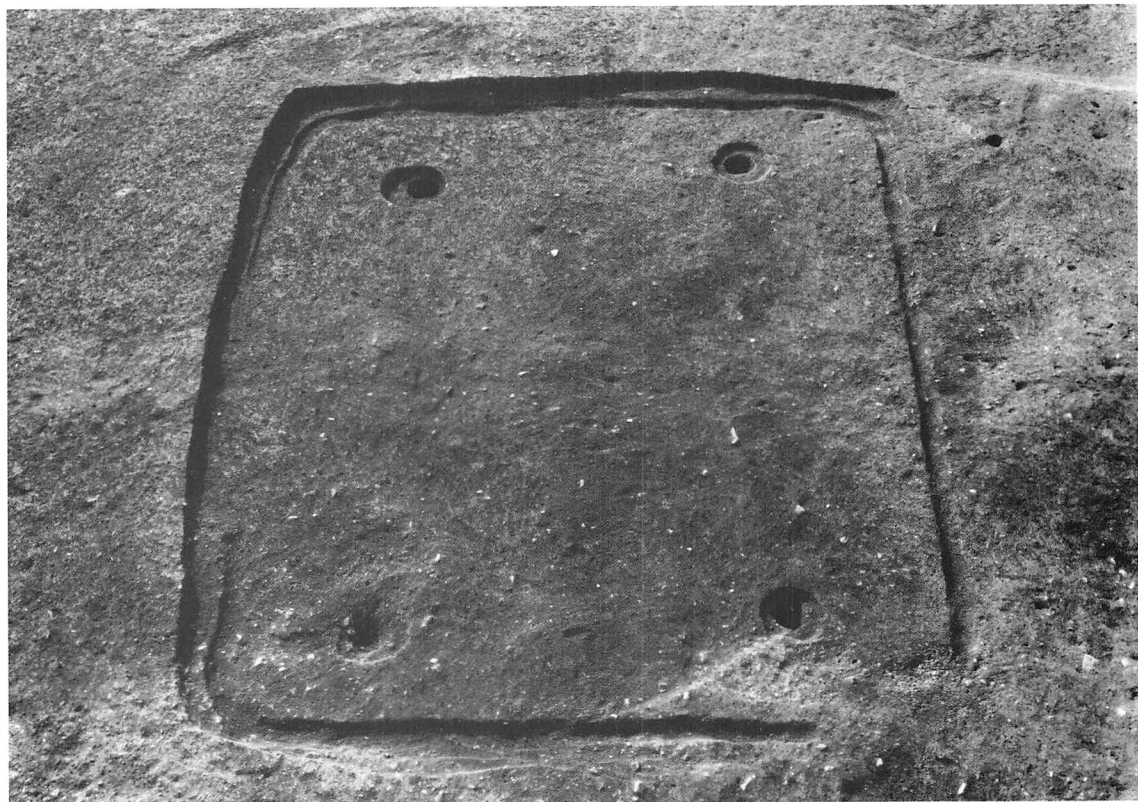
2 SK1



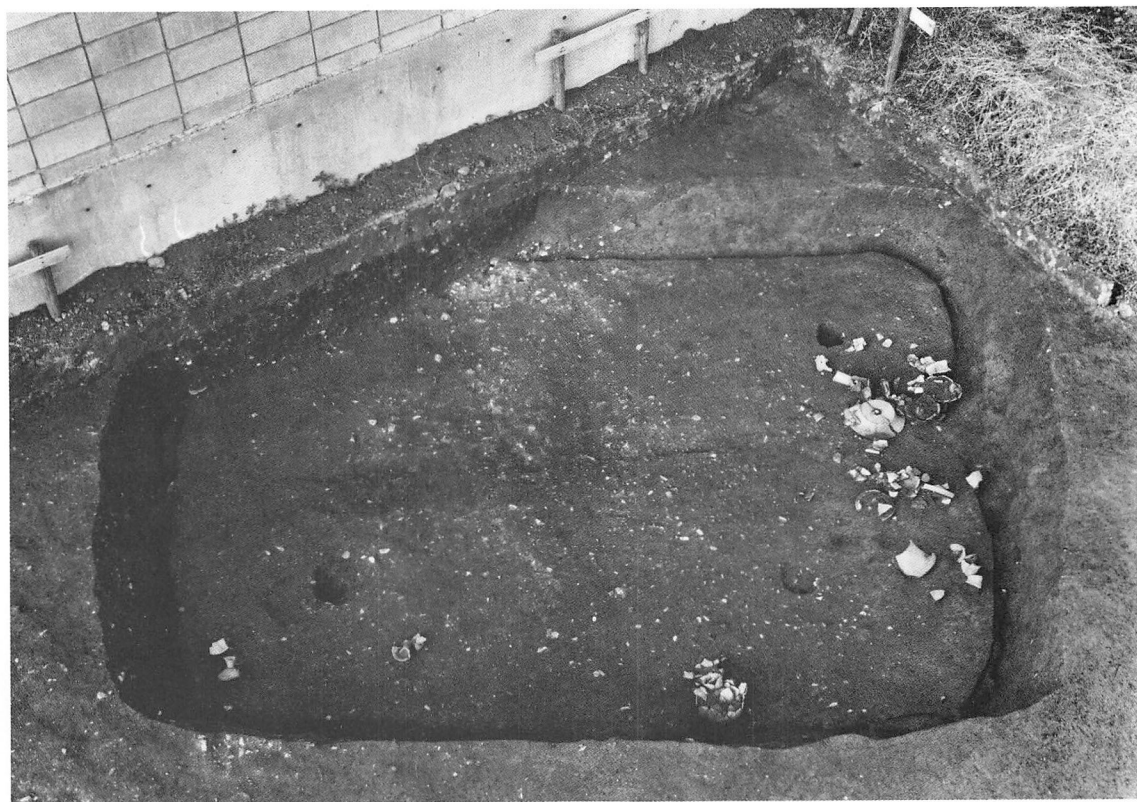
1 1号住居址全景



2 同遺物出土状況



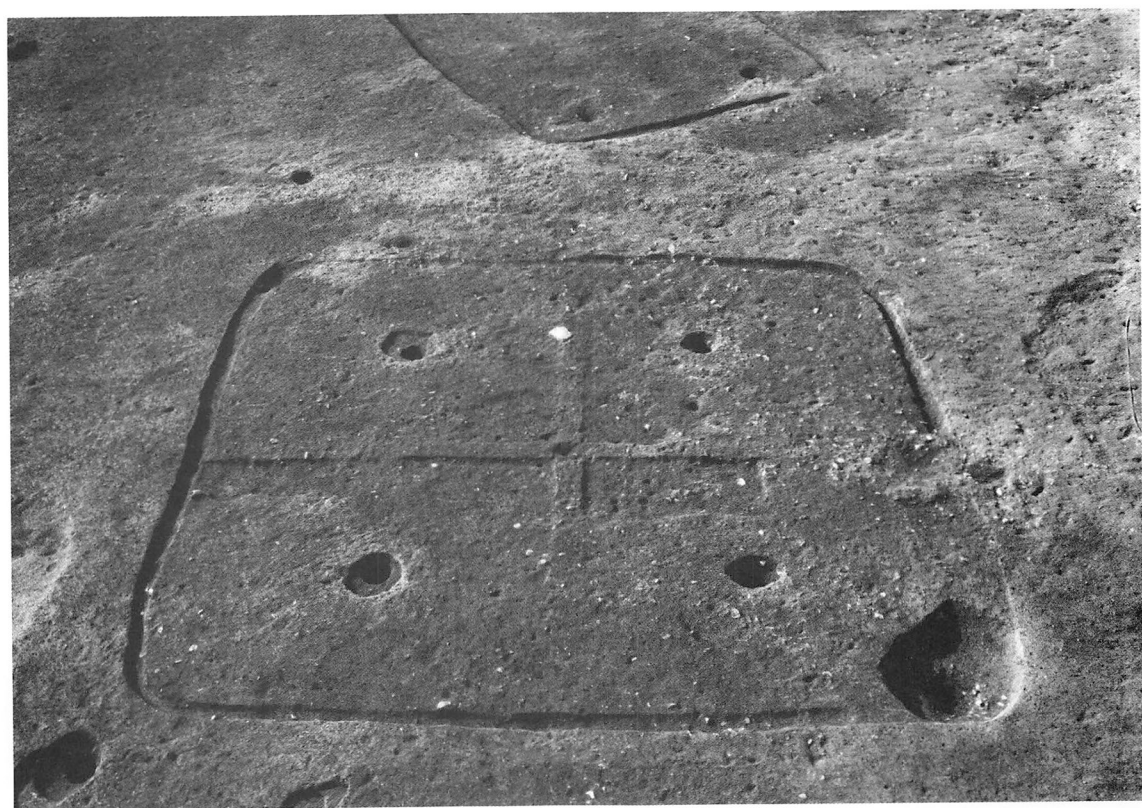
1 2号住居址全景



2 4号住居址全景



1 5号住居址全景



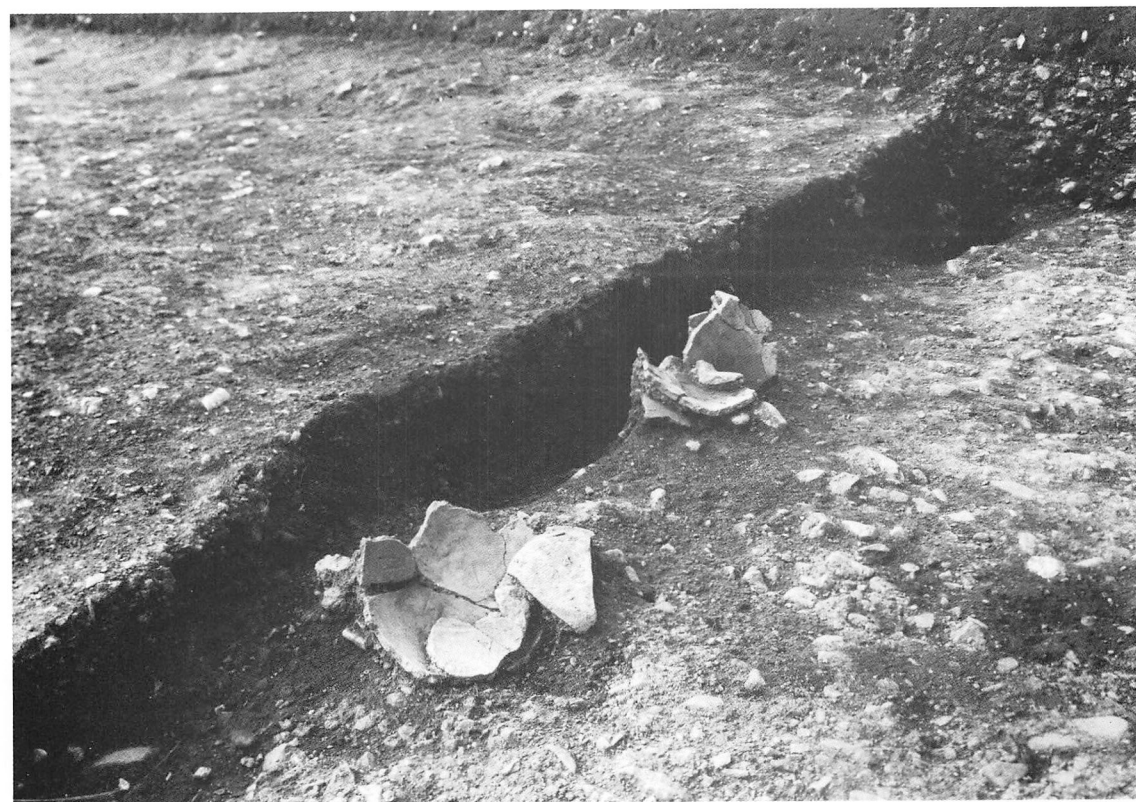
2 6号住居址全景



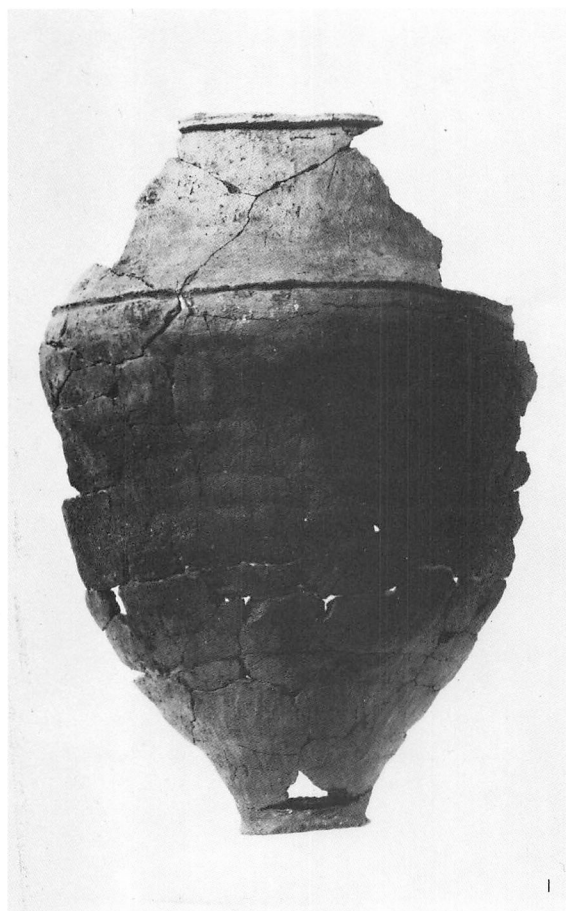
53次全景



1 1号住居址全景



2 同遺物出土状況



S K 1 出土土器(1), 1号住居址出土土器(3・6), 4号住居址出土土器(23)



1号住居址出土土器(8・9・11・12), 4号住居址出土土器(21・27)



1号住居址出土土器(10・13・16・18~20), 4号住居址出土土器(25・26)

中臣遺跡発掘調査概報

昭和57年度

発行日 昭和58年3月31日

発行 京都市文化観光局
〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
〒602 京都市上京区今出川通大宮東入ル元伊佐町265-1
TEL(075)415-0521

印刷 (有) 真 陽 社
〒600 京都市下京区油小路綾小路下ル風早町566
TEL(075)351-6034